

自他ともに輝く

私たちはそれぞれ自分の人生の「主役」です。同時に、他の人の人生においては「わき役」といえるのではないのでしょうか。自分と他者とのよりよい関係について考えます。



自分の人生の 主役は「自分」

私たちは、一度しかない人生をよりよく生きたいと願い、日々努力しています。自分の人生が、たとえ気に入らないものであっても、自分の人生を他の人が代わってくれることはありません。私たちは自分の人生を主役として生きているのです。

また、人は一人では生きていきません。家族をはじめ、友人や職場の人たちなど、多くの人とかわりあいながら生きていきます。

今回は、夫婦間の身近な話題を通して、自分と他者とのかわりについて考えてみたいと思います。



離婚を決意
させたもの

会社役員Aさんの奥さん(64歳)は、次のようなきっかけで離婚を決意したそうです。

ある朝、Aさんの家の桜がきれいに花を咲かせました。日ごろから楽しみにしていた奥さんにとっては、待ちに待った開花かいかがでした。そこで奥さんは、朝食を済すませたご主人に、

「ねえ、あなた、桜がきれいに咲いたわ」

と言いました。しかし、ご主人はいつものようにじつと新聞を見たまま返事をしません。奥さんは、聞こえなかったのかしらと、もう一度、

「ねえ、桜がきれいだわ」

と言いました。するとご主人は新聞から目を離さないまま、ひと言、

「それがどうした」と。

奥さんは、心の空洞が一挙に広がり、生きる意欲が失せてしまったかのように愕然としたといえます。

三十数年いっしょに暮らしてきて、心は何一つ通じ合っていないかった、いったい私は今まで何のために生きてきたのかという思いが、奥さんに離婚を決意させ



たのです。

言葉には、その人の心が投影されま
す。特に、いつも身近な夫婦の間では、
日々の何気ない会話や態度の中に、ふだ
ん考えている思いが表れやすいのです。

(別冊ニューモラル『よりよい夫婦になるために』モラロジー研究所刊より)





「結論から
言え！」

渡辺武さん(たけし)(48歳)にも、同じような経験がありました。五年前のことです。

*

渡辺さんは商社に勤める営業マンとして、入社以来、営業畑一筋で働いていました。ばりばりと仕事をして成果をあげることが自分の生きがいでした。またそうした努力こそが、家族を養い、家族を幸せにすることだと信じていました。

長年の努力が実を結び、渡辺さんは四

十二歳で営業部長になりました。渡辺さんの会社では異例ともいえる大抜擢で、渡辺さんは社内でも一目置かれる存在になりました。

しばらくの間はそつなく仕事をこなしていた渡辺さんでしたが、仕事の量も増え、また仕事の内容も変わってきたこともあり、それまで明るく多弁だったのが次第に無口になり、そして考え込むようになっていきました。

仕事は家に持ちこまない主義の渡辺さんでしたが、あるとき、自分でも予想しなかったような事態が起こってしまいました。

「ただいま」

「お帰りなさい。あら、あなた、顔色が



よくないわよ。最近疲れているんじゃないの?。」

「うん……。」

「食事を先にします? それともお風呂?

」

「ああ……。」

「どちらでもいいのなら、先に食事の用意をしますね。」

そう言つて妻の幸子さん(40歳)は、着替えをしている渡辺さんを後にして、遅い夕食の用意に向かおうとしました。ところが幸子さんは、何かを思いついたように戻つてきて再び話し始めました。

「ねえ。今日、お隣の奥さんから声をかけられたのよ。私が朗読ボランティアをしていることを誰かから聞いたのね。結婚前にそういう関係の仕事をしていたんですかとか、発声の練習なんかするんですかって。そしてね……。」

幸子さんは、渡辺さんが自分の話を聞

いてくれているとばかり思って、機嫌よく話していました。すると、突然、渡辺さんが怒鳴り声を上げました。

「結論から言え！ 結論から！」

幸子さんはびつくりしました。渡辺さんがこんなふうに怒鳴るなんて初めてのことだったからです。

「今、仕事のことと頭がいつぱいなんだ。だから、何が言いたいのか、結論から言ってくれよ！」

幸子さんは悲しみをこらえきれませんでした。

「もう、いいわ！」

そう言い残すと、幸子さんはうつむきながら台所へ行ってしまいました。

“しまった”

そう思った渡辺さんでしたが、言った



ことを取り消したりはできません。

“いったい、自分はどうしてしまったんだろう。どうして、あんなことを言ってしまったんだろう”

渡辺さんは自分でも啞然としていました。



人生の「主役」 「わき役」

翌日、幸子さんは朝から口をきいてくれません。渡辺さんも素直すなおに謝あやまる気にはなれずに会社に出かけてしまいました。会社でも渡辺さんの気持ちは晴れず、いつものように仕事に没頭ぼつとうすることができませんでした。

そんな渡辺さんの気持ちを助けてくれたのは、昼休みに書店で手にした本でした。ページをめくっていた手が止まったところには、次のような文章がありました。

—どんな

人だってその人の人生という舞台ぶたいでは主役である。

そして自分の人生に登場する他人は皆それぞれ

の場所で自分の人生の傍役わきやくのつもりでいる。

だが、胸に手を当てて一寸ちよつと考えてみると、自分の人生では主役の我々も他人の人生では傍役わきやくになっている。

たとえばあなたの細君さいくんの人生で、あなたは彼女の重要な傍役である。あなたの友人の人生にとって、あなたは決して主人公（ヒーロー）ではない。傍をつとめ





る存在なのだ。

(中略)

だが人間、悲しいもので、このあたり前のことをつい忘れがちなものだ。例えば我々は自分の女房にようぼうの人生のなかでは、傍役である自分を忘れて、まるで主役づらをして振舞ふるまってははいないか。

五、六年前、あまりに遅おそきに失ししたのであるが、女房にようぼうを見ているうちに不意ふいにこのことに気がつき、

「俺……お前の人生にとって傍役わがやくだったんだなア」

と思わず素頓狂すうとんきやうな声をあげた。

(中略)

以後、女房にムツとしたり腹が立つ時があっても、

「この人のワキヤク、ワキヤク」

と呪文のように呟くことにしている。すると何となくその時の身の処しかたがきまるような気がする。

夜、ねむれぬ時死んだ友人たちの顔を思いだし、俺はあの男の人生で傍役だったんだな、と考え、いい傍役だったかどうかを考えたりする。もちろん、女房の人生の傍役としても良かったかどうかをぼんやり思案もしてみる――

(遠藤周作著『生きる勇気が湧いてくる本』祥伝社黄金文庫)



大事な 「わき役」

渡辺さんは自分の人生を精いっぱい生きていくと自負していました。ですから、仕事で夜遅くになっても、妻ならば起きて自分を出迎え、夕食の用意をすることが当たり前だと思っていました。渡辺さんにとって、幸子さんは確かに「わき役」でした。

ところが、妻である幸子さんから見ると、幸子さんの人生の主役は幸子さんであり、渡辺さんは「わき役」なのです。

そんなことはこれまで考えたことがありませんでした。まして、自分が「良きわき役」として、どのように妻に接することがよいかなど、考えも及びませんでした。

その日の夜も渡辺さんの帰宅は夜遅くになりました。しかし、いつもと違ったことがありました。家の玄関に入る前、渡辺さんは心の中で次のようにつぶやいたのです。

「幸子の人生では自分はわき役、わき役。わき役は主役を輝かす大事な存在」

そう思いながら、渡辺さんは着替えを終えたあと、台所に立つ幸子さんの不機嫌そうな顔を見ていました。すると、昨日の自分の暴言がどれほど幸子さんを傷つけたかが分かってきました。そして幸



子さんの人生の「良きわき役」として、自分はどうすることが幸子さんを輝かせることになるのかが分かってきたのです。「いつも、遅くまで手間をかけさせてすまないね」



そうやって、渡辺さんは昨日のことを
幸子さんに素直にわびることができたの
でした。

以来、渡辺さんは、何かあるごとに、
「幸子の立場や視点から見るとどうだろ
う」と、考えてみるようになったとい
います。

「主役」は
自分中心に
なりやすい

それぞれの人生の「主役」である私た
ちは、おのずと自分を中心にしてものご
とを考えます。ですから、人と人とのか
わりあいでは、いろいろな衝突しょうとつが起
ります。

例えば親子関係において、親の立場で
子どもの言動を見てみると、親の思うよ
うにならない子どもには腹が立ち、憎にくら
しくなるでしょう。また、職場にあつ
て、自分の言うことに間違いはないと考



えている上司は、異論を唱えた部下に対

して、上司の指示に従わないやつだとい
う思いが湧いてくるでしょう。

しかし、子どもは自分の与えられた持
ち味を発揮させるべく精いっぱい生きよ
うとしているのであり、部下も上司とは
違った角度からよりよい仕事のあり方を
考えていると見ることができます。

私たちはだれでも、自分の人生を輝か
せて生きたいと願っています。自分を取
り巻く人は、皆そうしたい思いを持って
いることを認めて、自分が「良きわき役」
としての役割を果たしていくことが大切
だといえるでしょう。

こうした意味で、私たちは自分の人生
の「主役」であると同時に、他の人との
かわりにおいては「わき役」でもある
のです。



自らも立ち、
他も立つ

自分と他者がどういう形でかわわっているかについて、駒澤大学「こまざわ」の名誉教授な良康明氏「らやすあき」は、講演の中で次のように述べています。

——「原始仏典」の中に次のような話があります。

コーサラという国にパセーナデイ「たせえな」という王様とマツリカーというお后「おごう」がいました。あるとき、王様はお后に向かつて尋ねました。

「この世の中で、あなたにとって一番大切なものは何かね」

お后は、少し考えたあと答えました。

「私自身でございます」

王様は自分の予期した答えが返ってこなかったため、一瞬黙「だま」ってしまいました。すると、今度はお后が王様に向かつて質問を返しました。

「王様、あなたはいかがですか？」

すると王様は、

「やはり、私自身かな」

と答えました。しかし、王様はなぜか面白くありません。そこで王様は、祇園精舎「ぎえんしやう」に釈尊「じやくそん」を訪ねて、このお后との会話をしました。すると釈尊は「それはさうだ」とお後の言葉に納得「なつやく」したあと、次のような話をしました。

※祇園精舎：釈迦と弟子たちのためにつくられた寺

※釈尊：釈迦のこと

「どの方向に心で探し求めてみても、自分よりさらに愛しいものはどこにも見いだされない。そのように他人にとってもそれぞれの自己は愛しい。だから自分（を愛する）のために他人を傷つけてはならない」と。

つまり、自分は大事にしなければなりません、それは好き勝手なことをしてよいというのではありません。自分が自分にとってかけがえない存在ならば、他の人にとっても「自分」は大切なものだから、大事にしてあげなければなりません。

そこに「自らも他も立ち、他を立たせること」によって自らも立たせてもらう」という考え方が示されています——

(要旨)



自分の人生が大切なように、相手の人生も同じように大切にすることができれば、お互いの人生はいつそう豊かになっていくに違いありません。

相手を尊重する、相手を認める、相手を思いやるというのは、こうした意識をもつて相手とかわかることだといえるのではないだろうか。



自他ともに輝く生き方

映画やドラマには主役がいて、わき役がいます。わき役がいることで主役が輝き、主役が輝くことで映画やドラマ全体が輝きます。人生という舞台では、主役とわき役は表裏ひょうり一体の関係です。どちらも私たち自身の姿であり、大切な役割なのです。

家庭においては、夫を輝かせるのは妻であり、妻を輝かせるのは夫です。子どもを輝かせるのは親であり、親もまた子どもによって輝きます。職場にあっては上司を輝かせていくのは部下であり、部下を輝かせていくのは上司です。

私たちの人生は、他者とかかわりあいながら生きていくものです。そうした中で、主体的に他者を輝かせようと努力する人は、おのずから輝く人生を送ることになります。この生き方が、自分も他者も、つまり自他じたともに輝く生き方につながっていくといえるのではないのでしょうか。